柴田光蔵先生『ローマ法便覧』ROMAHOPEEDIA

著者： 柴田, 光蔵

著者名の別形： Shibata, Mitsuzo

発行日： 1-Jul-2013

URI： <http://hdl.handle.net/2433/175506>

出現コレクション： 柴田 光蔵

はじめに →[prologue.pdf](#)

目次

[A] 部門：「法律ラテン語格言の世界」

ラテン語入門文法の解説からはじまって、「格言」というものについての、さまざまな角度からの説明などが、ここにふくまれています。同時に、これには、次の [B] 部門での格言読み解き作業への橋渡しをする役割もあたえられています。160 ページ(概算：1 ページ 1000 字で計算した数字：以下同様) →[section A.pdf](#)

[B] 部門：「法律ラテン語格言集」

この「ロマホペディア」の総データの 40%以上を占める部分で、4000 項目以上のラテン語格言命題の私訳=試訳とともに、ごく個人的な見方にもとづいた各種の解説や説明が、いくらかそえられています。1048 ページ;その「索引」は、便宜上、末尾の [P] 部門におかれています。

A	→ section B-A.pdf
BC	→ section B-BC.pdf
DEFGH	→ section B-DEFGH.pdf
IJ	→ section B-IJ.pdf
LM	→ section B-LM.pdf
N	→ section B-N.pdf
OP	→ section B-OP.pdf
Q	→ section B-Q.pdf
RS	→ section B-RS.pdf
TUV	→ section B-TUV.pdf

[C] 部門：「プーブリリウス・シュルス(PubliliusSyrus)の世界」

「タテマエ・ホンネ二元論」の視点から見た場合現代のビートたけし氏になにやら通ずるところもある、カエサル(シーザー)と同時代に生きた文人で役者の「シュルス」という人物が、味のある多数の格言のかたちで展開している独特の想いを紹介するとともに、解説をいくらかほどこしています。152 ページ →[section C.pdf](#)

[D] 部門：「ローマ法学者のコモンセンス」

ローマの生の法資料にももつぎながら、ローマ法史上重要な役割をはたした知的エリートである法学者たちの「コモンセンス」を抽出することを試みた作品です。60 ページ →[section D.pdf](#)

[E] 部門：「学説彙纂第五〇巻第一七章『古法の各種の法範について』」試訳

ローマの法資料(法典)に「法範」として採録されている具体例 211 個の邦訳を示す部分です。42 ページ →[section E.pdf](#)

[F] 部門：「法学の歩み」

ローマ法を裏からも表からもしっかりと支えてきた「法学」の全史と、ローマ滅亡後の時代におけるローマ法学の独特のありかたの流れとを概観する作品です。207 ページ →[section F.pdf](#)

柴田光蔵先生の『ローマ法便覧』ROMAHOPEEDIA が、2013 年 7 月 1 日に、「京都大学学術情報リポジトリ KURENAI 紅」で、公開されました。先生のご了解を得て、本 HP (<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/>)ともリンクさせていただきました。この機会に検索に簡易なアクセス目次を作成致しました。ROMAHOPEEDIA の利用にご活用いただければ幸甚に存じます。2013 年 7 月 24 日 HP 管理人

2014 年 6 月 30 日に ROMAHOPEEDIA II が公開されました。
<http://hdl.handle.net/2433/188828>

2014 年 10 月某日に ROMAHOPEEDIA III が公開されました。
<http://hdl.handle.net/2433/191016>

2015 年 4 月 1 日に ROMAHOPEEDIA IV が公開されました。
<http://hdl.handle.net/2433/196743>

2018 年 4 月某日に、ROMAHOPEEDIA V が公開されました。
<http://hdl.handle.net/2433/230845>

本編をもちまして、『ローマ法便覧』ROMAHOPEEDIA シリーズは完結とのことです。本編末尾には、著者による「編集後記」も収録されております。

[G] 部門：「ローマ法史概説」

ローマという国家とローマ法の歴史的な流れを概観する作品です。204 ページ →[section G.pdf](#)

[H] 部門：「ローマ法における人」

法システムのなかでもっとも基本的な「人」の位置・座標について、三つの角度から考察を加える試みをしています。220 ページ →[section H.pdf](#)

[I] 部門：「ローマ私法概説」

民法および民事訴訟法の、文字どりの概説です。そのうちの「人にかんする法」につきましては、すでにさきの [H] 部門で取りあつかいました。195 ページ →[section I.pdf](#)

[J] 部門：「ローマ刑事法概説」

民事法のシステムにくらべるとやや見劣りのする刑事法のシステムの、文字どりの概説です。34 ページ →[section J.pdf](#)

[K] 部門：「『タテマエ・ホンネ』二元論をめぐる 225 のポイント」

私独自のもの(?)と思われる分析視角を用いて、ローマ・ローマ法を二項対比型のスタイルで解析することを試みた部分です。内容の点では、[C] 部門の「シュルス論」とも連動しています。どちらの部門においても、現代日本の法・法文化のありかたの位置づけを念頭におきながら、古代ローマの特質を浮かびあがらせることを目指しています。144 ページ →[section K.pdf](#)

[L] 部門：「ローマ法技術論時間軸の視点から」

法のあるところには、どこでも、法技術が生まれ育っているのですが、ローマの場合、その技法は実に多彩で、現代に対して示唆するところも多いように思われます。「タテマエ」と「ホンネ」を巧みに使いわけけるテクニックは、広い意味での法技術に属しますので、この [L] 部門には、さきの [K] 部門と重なりあう記述が多くあります。84 ページ →[section L.pdf](#)

[M] 部門：「『ヘレンニウス弁論書』素描」

ギリシア由来のローマ弁論術の手引書を翻訳して紹介する部門です。ここには、ローマの大先輩であるギリシアの文化の匂いが漂います。59 ページ →[section M.pdf](#)

[N] 部門：「キケローの『アメリアのロースキウス弁論論』」

文人政治家キケローの出世作である、最初の刑事弁論の翻訳および解析を試みた部分です。118 ページ →[section N.pdf](#)

[O] 部門：「『法律ラテン語格言集』読解用データ集」

ラテン語命題 V を読み解くために必要な各種の参考データがおさめられています。89 ページ →[section O.pdf](#)

[P] 部門：「索引」

[B] 部門専用の索引です。139 ページ →[section P.pdf](#)

[番外編]：「付録」

本来なら、これらの各部門の本体のなかに、さまざまな図表や文法変化表、さらには「格言めぐり」のシリーズなどが組みこまれるはずだったのですが、諸般の事情によりまして、このデータベース自体のなかに、200 ページをはるかに超える量にもなる、これらの資料データは収載されておられません。それで、それらの資料は、「付録」として、別途おとどけする方法をとらせて頂きます。それへのアクセス方法などにつきましては、つぎの②③につづく部分にある説明を参照してくださいませう。→[prologue.pdf](#)